滑稽

夢補譚

三編

下

へ13
3761
9

門へ13
號 3761
巻 9

夢輔譚三編下之巻

江戸　一筆斧戯作

文一布屋

斯て麦酒のいやひもすゑ縣の帯の合成ものとそん
背こと楽まで眼八目傍みなを俱ふ乳の毒と云へた
の多りて沈すべるく駄ゐて有金の書で一杯乳飲付んと云
の中の婦徒利氏賀見あがら眼へ義先生ぐんが結の陰て接て
ちさこ門くそんゐふ蕎の新紙して居なすつてもさへねェアノ紙者
ふ酒て二ハやう巳ねェサノ婦ぐ付ゼト助のあへく一ろんぐ付ゼ

ア　殿様とこの方ちうちうへてひどいめあへて来てこのまく赤い赤し
ちくちくや　みんさま　なぜいこう
物凄度の源氏と魂とをけへて今とせーめさ報ひざらう色ぐそん
の盗賊の黄い新ごト　とぐんハさい　眼　ちらうそく　ぐれくひ　うまのハどこ　まち　浦辺の流罪ぐ幾後所の振
袖い止めさぜ　「接ハめやアねェぐ今更思ひあうはしさけ後悔先
さ　ようと
ふ立びざ恵いのやアちめへのんぐざぜ　眼　「ちめへのんちうち安く負て仕ちうぐ
ぐんくちうぐちあく　ぐん　さえ　いの　そのと
いく恨さ寒風の恨ぐ先へうさうさう後悔ちまちよト言へちうめざ
ちめ　ぐんこう　さけ　「眼公ちらア酒ぐきさてきさうさう書ぐ欲くなつて来さ物ぐさん恨
ぐん　きん　ぐん　きて　ぐん　ぐん　ぐん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二百ばかりめへくうの寄やさん「さあうでござりまするぞ」
るすいって「さあうあのしゆうばと二百文ばかりさのまし」
まちて「サア二百文と二百文寄ましさん大きなお世話寄でも寄でいるな
せへと「こりやアあのござうこざりまする」「こりやアあのござうこざりまする」
あのうと「まあ」「沖揚と鱠ラ服いつぺの冷せ」
せへと「先生ごうざいめい様揚ごせ人の孤とを」
ちめへ孤めとり分れいまねへうのうめ表ばごりてのご今年
あのをとを云寄ごりしのうう見めうごを文ごりをとめへッと

とへるる「あんでもいい沖揚とを冷せうごいい」
多と服「それ文やア沖揚と買て来ましうと」こりやごうするのご焼
の煮のいつも揚屋町の沖揚ごいの小柄茶の石揚ごいのと云
服ばかりしのうざと「焼ごとまを文でいい文へ个さいと」
「サア寄り孤ばせへと」「どうもうまごごうてえご
いつねへと「まあ寄りごと」「毛ア揚の」
身の円ごう寄冷もいうげんのまるせへ「あの揚のいのうの
冷やそうごアえを持て来さるしあへとの服八のまのごうとて来まへの

あるまい　眼　豆腐屋で勝手紙つぶして居らア　百度参り紙するぜ　今
ど　ぢまいろ　来さア　あてるのもねエト　又なやくろうてる　「おりとへさるる
度八十枚貰て来さア
「このー　稲ヲエ　大このーろうへ　今日へよろーうどざりますうと
内へこんとうけうと　助さんで　そこのーろと三年ひ　見もまこけもさぐ
むやくらへ　眼　ものも助ぢさみふうひうのもうみるふざのさーやと紙
すうのへそのきでかくひげこのーろとうのでかとこぎろと　眼　「こりやア大
きそのけごちりのこぐどうとーてうそきこうくるりく来
人
爪ぐどうしてもきろ　下ぐこう　付て来さみちげくねエうへト
眼八　ごろ　ようみ　ものこ　ぐ　ぐ　ぐ

野狐
夢捕ひ
還着して
雞と油揚を
飽食せ

さのよ吸ぬして居まるぐ物ぐ
来るまろくと云ひぐちあろう「ろう程えまーぐあんでもよく寄り
まるアあ和この中ひ元ろるあんでもるふあぐ三第て淋第はの元の
家ナるくろふッ就ろつて今アハアたの通者夜ひるてぐろくと云こん
でゆう出ちと弱毒ッぐ楽ひとぐ中ひ元でせへ
さう寄るめッ且形夜ハ見毒ーぐんべいはまも云ばとも推毒で寄る
べッふぎみこんどアハとふとつりてかさん一ふく吸ますべサトハぐん
一こりや出先みせへトれもで居さとう無れいとしさト

こりやアハろ食ひひるさるみト腰のまろて
さぐぐぐ入とぐう ハテる明れて寄アもれさアが
らんとろくるり さうぐッけふとろ辺で白月鬼どのふ切まべいト号て懐サ
押ひで来ちくッけト
気でぐぐうまた
さ一電でも吸ますろ吸ぐ不電ひでもるくれちやアいよ大変ぐト
大のくとるうぐくひのところ人寄助ふきるひのだけりめっまとのぐ
ある助へまるひ付とのつ吸まぐうくくねひ入ひひぐ吸くーてる
ぐぐるめへサ寄年のくらくら方も不作でアア麦も米のたアづまとまし
さアア大豆もたアづまてアア村方アア困窮のッあまちすろ無れろ年で

ごごろう兵衛殿なんざア大今病の疱瘡抜で今ごろアでもくしてのもって
ごごろうんざアだおろさ家のうちこちらもいぞまで抜せてはんぜいなぞア
さねせへふんさろてもうさねエふえてこれ病エ今まで寄こアのもの沈
の蒲鉾ねエのサイト　ゆうくとそこ白てある服八きぐのめざまぞ来さ〜栗たるか
うちの服　さあうクチマアなんかーろあいやこのもで長の長物と
ごろく　ひとけさいこと
の人へ今病エそまでいきまこ〜ぐ先へ一人寄こぐ抜って長まこぐ
ぞうも変ちたるるで油揚と鞴でもこう冷て寄まこぐ似せ
ねて
おもうころころねエこう今前ち長とするのぐ来こう長文の逆へ

めてごろうこれねエけりやアるめへと思て長ところサ　そうや長ろと
いござこうねエこうしどもハハア油揚の二十枚や三十枚へ釣ッたこうの蒲鉾
ざア鞴ごッてもきあうござアの年中酒鞴べエ冷て長まこうこう適
鞴長ア冷へ附ろへ鞴の三十や四十冷へのハア板一べエの沈もこと
ぶひきーねエサト　服　文やアの長ものこ列の光柳ごこと云て
トうまづたるこうこうこそきあうの多こまぐ又ものこ下油揚と鞴と買へせる
のねてかるこうこそ
ねぐざ手ものへ冷ねエコルア先生成紀ーやせうも長ものきやつの仲る
でも兵屋の石代亭こうへこーぐふぐん沢地長成

するのんざうゝ仕方ざねェ病人の服まろりでもんでもえ人ニッ多いで
世ーさうへざのよく云ざきまうあうゝ紙でも大家さんへでも知せねェ
りやァあうゝねェ云く先生ト鼻助を面平面
の号ろう出そうる
久
吟醫ろうそりやァよんべいト久べ眼分眼
いとあ紙
てもあんべざ丈ぶ鼻の仲ざァ達て明治してえねェト久
ひきやのもやじ
もやあ助とそ
旦那衆はあうゝねェト
えんなのいうらァやざァ油揚ざゝゝ雷さまべいト
コリヤアえァけうもでもあんべさあんでも長ざるべい云ッあの紙

とーやァハァお帳中ニ半チすべの大金ノウ渡さふこんなァお指南なんの
あおよさべいも相撲さるりやさあ國さ郷ッて来ー まチすべさ
お有と温飩粉ざァの蕎麦粉ざァのと拵て来まゝゝァざ人遠で
も云ゝゝゝゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ眼
丈ざゝゝ知るりゝく蕎麦せへあのの拵て長る金ゝ云も本の家
ざゝ分のざゝ云ゝとねェそーそそだも粉であゝゝのゝざ搗へゝゝ粗
問ふるざゝうあめへざァあゝ拵て粗ふきそもモウ油揚や鯖
い振義るべト とうそもつるねあいさうめひきやのあやじもぜんゝゝく濃のうちん
ふんそうの考ゝとん高しひとまづやよやへゝゝけるこゝりのこの

面強ケて眼八ふかく
ふかくとぢわる
一ことも
眼八さん先生どうしてこのご
「イヤどうも
大変サト
ふごふ
ありて
まつへまいつる
間ちへ狐ゲ変物ゐ化て来く
居
まつと同ドきまつの仲ゑゲ発狐ゐ化て来まくゲ私ゲさつい雑
さてませんゆ今ゆりはしさごうゲ乳紙お付ゐそつくれさのはし
私い変史の処へ注てめへりまん
「なんふーろ不義をつのざえ
注て来るさい間ち紙ゲつてあゲませうト
きんぞよのの三人変物の
内へえのまごもゆ物へ接接の
せまぞ知ぬれゆそまりくてゐる中へ近所のゆ
こざゐるんとこまくゐゲまゆひのくきまつ
ゐる眼八ふぶうごとゐふうふゐそゐりし
ゲりてさうくゐ来りゐさのとあくゐさせんと
ゲ付ゲ
以附まつの接変村ゐ

来ちうまみ
変物の魂白狐の糞ゐ這入て来ちうまゲ肥狐ゐ変物の糞を貪
て油揚と鯖の喰殺せさせんと鯖橋の宅へ来しゲ白狐の魂ゐ鯖
物の糞ゐ在ゲくゐ中素敵まれて這入て来ゲて変鯖物ゐ先の体ゐ
ありける中へ横門へ入きゐ怪び実ゐ変物先生ゐ弟代の敵ゐ
稲荷へゐ撫まりゐ来りける変物ゐ完早肥狐を追返さんと反
くくと唱へゐ変鯖の魂忍ちゑ入へゆりて白狐肥狐もをとくゐ
いぜん
いゐの糞と注りゐ
「どうさゐ中ゐ若男でぞうまくゐト
あいさうーてどれくゐ変物へ

どこぶ振まうすと云るこの子は美男ぶめを見ざるなく死さ眼を
火く著椒を買て来さッー「ゑんふるのご「大神へくべてあのしまこ
のぶせく今こ出雲成堤へさそるぞ迎るとのけねェそこてをメて歩る
せェトさん「ーこれぶとありのこのもこ」「こまこ六
あてさぶ歩うすこれのゆぎろぶ山まこあぶげこのうるんぶ城ひちゃ男
せ男のさうぶうるくんとかりひさけそくふ新て出るふのるする
ぶるこの「ちゃるさうまこる私へ今ろるこへ病人がありて寄りま」
と処ぶ途中で解こ者ふ鋒まうて千住酒せこべるーまこ新
ぶで実人ゆりまこぶ大碑で例の注まこねるまーて眼八ふ

こころのまこと三へまこのヲ眼八ふらァ分ふ初こるんぶ霊九弟
さんと吸ふ西まこさのこ西目注弟めねェるぞぶざうまこモウさッ
なり碑ぶさうまこサクくどるこもかうまひるくかまこの子ふさる
とるかゆりるのさるとる考て个さのほ」眼八ふ家でも拾へるせへて
かれの義千万ふー「熱ーてさあこりのゆう千四大分さけれうこさうふの
ゆとまるくへこりあ「大ぜのへぶ来さと見てそんるこち利ひるふ戒
あこふのこうくこ
ふこッても著椒でいこされゆうと見てへェさうふ虎の皮のこん
どーぶ「イ弁徐ぶあいく今こ碑て居さのサあの人ふ知て居る

あやァねェうモウ者の爰捕ざョ「いやく丈でいきの宮ゞ高くつゞ
の爰助でゝおりまいさうゞの爰助ざらうぜ「はまゝゝねェこゝゝ
りんざこの宮もゞの宮もいるのゝる「そんゝゝゝゝぜ油揚や麩を
すゝゝゝ食ッさきの宮ざらうァ眼八「どうもりんざう きゞ
まねェおゝゝゝまいゝ視ゝ人も油揚ゞ好ざとねゝくれ
どもさうゝいねェ拾せねェゝゝ拾ッさのゞ今ゝ間合のゝ拾ゝ
で居ておゝゞ栗ゝ弟さんの処へ往て来るゝ不ゝゝ来ゝく
まいゝのゝ来ゝるのゝゝゝするぜ「今ゝ狸けれゝて流の下の

骨ゝゝゝ食て往義ゞァゝゝゝゝ

山茶亭
本金
尻尾伝
捜し
粟九郎
尻伝
生捕し

こてもぶ様様にて居るゐるゐるとぶ きつぷ成ぜひ出させるト 男助の きつ成
あちこちとさせて 男 「こりゃ さいてくそりゃア きつぷ ぶやア ねェきん
入とこうたまつた
男 「おざく あ 「そのうへのぶ きつぷ ぶらうつまつて 処ぶ きつぷ れて
い 狐いやうぶ ぶ ゐんめ ろふ とこ きつぷ ぶ 「 いそくこりやア
ゐゐゐねェモウ 飛ばうんぬしてそれ 「 イヤ 毛ぶ さ ッ さ 眼 白狐
ゐゐ毛ぶ白いたぶ ぶ まくッてこませへ 「 まくッて 白狐 ぶやア 松
ゐゐ廿八月ゐゐ月ゐ すぶ ぶ ぶ ゐる ゐ 風 て まくッちやさしくさ
のゐりい 白狐 ぶ ゐけりやア 脱 犯 ぶ 出 けつ ゐ ゐ ェ きつ ぶ ゐ と ゐ く

ぶ ッ ぶ 成 ぶ く ー 男 男 男 男 「 こ ッ ち ぶ け つ ゐ ゐ ゐ ッ ち ゐ ゐ の 童
尾 尾 ぶ ぶ ぶ

紙の袋とあるゝせろト服へ入るとき
あしとゝ思ひれば服「サア酒の肴も出来たらう是ゝあるとゞ竹の皮と
まとしも考へて
あるゝ服「それのゝ竹の皮とあるゝと処へ入る稲荷
さんでまるゝト竹の皮とあるゝのすきとる
どちらそう服「ア、お稲荷さんの
山芋をいめつゝかるゝ山芋をゝ大きゝ山芋をゝ服「ア、ちと紙ひゝれゝとゝ
へゝ服「果ゝゝねゝゝ雲ゝ接ゝゝ結ゝゝ服「今見ひゝとゝめゝ
らゝとゝゝのゝの膳ゝゝゝ

こんなうるさいでも濃の広間をまはるとこのごとく
あれ　夫　やアこれはうるさい　仙母　このようなこと百ぬの合点をうるさうて
その　ちいさい　ちいさいうちの　ちいさいうちの　ちいさいうちの　ちいさいうちの　ちいさいうちの
「服　「栗九郎さんも乳をもらうのうち
もち　わるいセュラクト　こんでもうるさいけれ　「栗九郎さんやアイク
あつうるさいさんやアイクト　まへうるさいあるさいうるさいうるさいう

のうこうどうで天くう降り地くう潤さゆうるを今ごろ面ぐん
のうと言て不多おれの情て美れねェ　とりやどうも孤め
推されても老人ねェまア皆なせ人おれが百姓の金を取そと
さと突く新城美川さのんどうく神棚くう見せ一寸附ぐ城
あてかめ人の見母金ものく正乳のあてがさのョ　そりやア正乳のあてが
遠いさ　ところで能勝の長兵衛の者られて有くあるさの物さ
ねェうちのあるおと今ックくう天乳のうかうお濃の兵衛あるさと
安母だ　あ　ぐんちやうくのうへちやうめちやウやけとちやちやうちん

やのちやうへくさトとりやア日本あるや人唐の横町くで
も来さのであらう　さうチャうくで濃でくうくねェ夜名
捨ひ去あてあるの紙ひろひ濃あちやア解せねェぐざなあ
貝負所二一目の横町提灯屋の長平方トあるれば今校
へ行るとい濃へ云乗さと言くうんあうろ姓てうんあう　服
ぐさア能御くとひって行るひて歩けと紙あうれへぐさ言へぜ
そんな酒屋へ寄ありざ　服　出るたり能御城のくく歩けるぐいち
あア　ぐんあうろサア行てうあう濃てのうへの市方別ざト

ゆそ屋うどでこを濱り見る所へゆんと
する白ふくろのあるあるあるあるあるく
分の義助義助どどこ〳〵ゐるハア
さつさと引ハ本道の花柳さんと今月ゐるて
のう世間の折病の記ッてかるうへ不孝子の服へかげまたし乳
ゐれて居る処へかるかげゐるて
き病中さ文でもあまく出ん切れ不濃へ不古紙ゑそんをすつさん
どう〳〵けれもそれれるつくゐるれれ
さ「い所ぐ」ぐるうとりい所ぐるち地の勝負サ知りまねエげ

「ヤア」おゐさ屋ア鐵橋のけんを

つーもれ有ハア遠方のヨ来さんぐァ不知れまーねエと言ゆの
ハア不主でもあんめいと云ひまして陳の部サ云ゆノヨーて亜まーる
ホんでも病乳が記ッてさぐるるつるげ分さぐるそんあてあんべと義
まーさぐ今義乳ゐ亜て文でるるるるハアあるるるあて出サ
ひどるべいと云ひまして今出ぐ「ぐるるもモウ病乳ゐ病
分てさるるぐ乳もるるるまーと「丁変るるる「乃さんどぐ
るるハアの紙べい渡ーまるべいサ金のあ云円表れるるるのの
不去べいハアト「るやア有難いト

義助之二下

と思へぞうら紙さげてゐるをいらぐく　ちうこうのぞうりけんとんびゲッッルよまの
さぐりゐるをさ〻ぐくうるぐのちやのうへ　ふさく出さう丸ちのうへ　ふ　ちりとイ　ロ
トうのそれを　思　「ヤア大ゆの　五紙を考めゲト　こへへあつけふらつれてうへを
見くく居る　てぐみ　こそうるをおあそでわうり
子ぐ　「ヤア　あの　俵　さんへ　五紙と考ふさ〻ふとこヒア　いく
大ぜの　天ぞ　わのと　ぐ　「うんぐゴ　いめくまーのゲ元
天不ぞ〻く　見元不一ット　子ぐ　ぐ　ら　ふ　「このつへぐうも
めゝゲ　ゆうまーのト　ちう　ゲ　ら　ふ　ぐ　ゲ　ゆ
ゆうこそちうくてかる　ふせんさ　ゆ
まゝ　太　変　ゆ　ちうる　ふ　「ちやアハアふべへ　ゆうふぐんゆ　「
ふ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
今も　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ

作者伏て稟さるの第子編て滑稽酒落めく
猥雑のるを近しと雖も素より勿論恋愛のこと紙
失ふる色情婦淫者の転化を托して題情不慎の害
利を泥を欲を貪りて生涯過ぎるを多く見て
ふ便るべき紙表紙ふ表つく福縁寿星長命ふ教
給の辯ふ及びて天命乃道理を悟しむ
分くて消るを終わり是一夕の戯墨にて
蓬ふ辯論を尽せ腹稿の没もあるまじ

夢輔譚三編下之巻

一筆菴主人戯作
溪齋英泉画

板元丁子屋平兵衛

迎めもあるを孫べ所謂ぶつ分書めるを表紙
乃得りあり斯紙の内く其社撰紙知らふ見べ一章
夢の為ふ筆紙揃く豆藏の所居てるをもめられば
一冊紙汚て冊子の新教を催作せべ書騒の章甚と
ロ編の發市迎ふあり翌ハ先く写紙絵と